旧約聖書の預言者

［私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』」］（イザヤ書6:8-9）

ヘブル人の歴史の中の預言者の位置

（1）旧約聖書の預言者は男女ともに神のメッセージを伝えるために召され、力を与えられ、特別なかたちで用いられた人々だった。その多くは通常の信仰を持った人々よりも神と霊的に深い関係を持っていた。けれどもある預言者は単独で働いていて、時には驚くほど不信仰になっていた。一方、旧約聖書全体でこの種類の人々ほど独特で劇的な姿を示している人（メッセージと人物の両面で）はいなかった。祭司、士師、王、賢者、詩篇の作者などはみな、イスラエルの歴史の中で特別な目的を持っていたけれども、預言者ほど意味のある立場に立った人はいなかった。またその後の歴史の中でも、神のご計画、目的、メッセージとのかかわりで預言者ほど影響力を及ぼし続けた人はいない。

（2）預言者たちは旧約聖書の著作そのものに大きな影響を与えた。このことはヘブル語聖書のトーラー（律法の「教え」、旧約聖書の最初の5冊）、預言者、諸書（⇒ルカ24:44）という三つの区分の中に見られる。預言者の区分には預言者の視点から書かれたヨシュア記、士師記、サムエル記第一、サムエル記第二、列王記第一、列王記第二という6冊の歴史書が含まれている。これらの書物の著者は預言者か預言の賜物を持った人だったと思われる。次に16冊の預言の書物（イザヤ書からマラキ書まで）がある。さらに聖書の最初の5冊（トーラー、モーセ五書）の著者であるモーセも預言者（申18:15）だった。そこで旧約聖書の三分の二は預言者によって書かれているのである。

預言者というヘブル語

（1）「ローエー」　このヘブル語は霊の領域を見、未来の出来事を予見する特別な能力を持っている人のことで、「予見者」と訳されている。この名前からわかることは、預言者は現在の情況の先を見、また神の視点から見ると実際はどのようであるかを見ていたということである。預言者には「ホゼ」という別のことばも使われ「先見者」と訳されているけれども、それは預言者が神から夢と幻と啓示を受取って霊的な現実と真理を伝えることができたことを意味している。

（2）「ナービィ」

（a）このことばは通常「預言者」を意味するのに最も多く使われていて、旧約聖書には316回出てくる（「ナビイム」は複数形）。このことばの語源は確かではないけれども、「預言する」というヘブル語の動詞は「神の思いから出た多くのことばを神の霊によって伝える」（ゲセニウス「ヘブル語辞典」）という意味だった。そこで「ナービィ」は神の御霊の力とうながしのもとで自由に語り出す、選ばれたしもべだった。ギリシヤ語の「プロフェーテース」（英語の「プロフェット」の語源）は「ほかの人に代って話す人」を意味する。預言者は神の契約の民（神の律法と約束、そして人々の忠誠と服従に基づく終生協定を結んだ人々→「**イスラエル人との神の契約**」の項 p.351）に神に代って語ったのである。そのメッセージは直接神から聞き、見たものに基づいていた。

（b）旧約聖書の中で預言者はまた、「神の人」（→Ⅱ列4:21注）、神の「しもべ」（⇒イザ20:3, ダニ6:20）、「主の霊が［illegible］上にある」人（⇒イザ61:1-3）、「見張り人」（エゼ3:17）、「主の使い」（ハガ1:13）などとも呼ばれている。預言者はまた、預言的夢を解釈し（ヨセフやダニエルのように）、預言者の視点から現在と未来の歴史についての見解を示した。

御霊とみことばの人

預言者はヘブル人の歴史の中で、単なる宗教的指導者ではなかった。神の御霊を注がれ、神のことばによって完全に捕えられた人だった(エゼ37:1, 4)。御霊とみことばが預言者の中にあったので、旧約聖書の予見者には次のような三つの特徴があった。

(1) 神から啓示された知識ー預言者は人々や出来事、真理について知識を与えられた。この知識が与えられた主な目的は神の選民が神に忠実になり、神の命令に従うように励ますことだった。旧約聖書の預言は教えと矯正と警告という方法によって与えられたけれども、その著しい特徴は神の目的を神の民に明らかにしたことである。神はしばしば預言者を用いてあらかじめさばきを宣告された。イスラエルとユダの混乱の歴史を通して神は忠実な人々を用いて未来の世界の出来事を予報するとともに、メシヤ(「油そそがれた者」、救い主、キリスト)と神の国についての預言を与えられた。

(2) 神から与えられた力ー預言者たちは神の御霊の力によって奇蹟的活動を行った。預言者は生きている神とその目的と力を超自然的な方法で現した。

(3) 独特の生活様式ー預言者たちの生活は通常の生活とはかなりかけ離れていた。ほかの人々のような日常生活を送らず、大抵の人が人生の目的を求めてもいなかった。その理由は神のメッセージを受取り、それを伝えることにエネルギーと焦点を集中していたからである。預言者は神の民の中にある偶像礼拝(まことの神の代りにせの神々やほかのものを拝むこと)と不道徳とあらゆる種類の悪に対して激しく非難した。また王や祭司の生活にある腐敗を非難し、イスラエル人の中に変化を推進しようとした。預言者たちの最大の使命は神の国とその義(正しい行動と神との正しい関係)を押し進めることだった。そして個人的危険を顧みずに神のメッセージを大胆に伝えた。

旧約聖書の預言者に見られる八つの特徴

旧約聖書の預言者はどのような人物だったのだろうか。

(1) 神と密接な関係を持ち、神がご自分の思いを啓示される人物だった(アモ3:7)。人間的視点からではなく、神の視点から物事や人物を見た。

(2) 神と親しい関係にあって密接な交わりをしていたので、人々の反抗と罪を憂える神の思いをしばしば感じ取っていた。神の目的とご計画と願いをほかのだれよりもよく理解しているので、神と同じ感情や反応を体験した。神の声を聞いただけではなく、神の心を感じたのである(エレ6:11, 15:16-17, 20:9)。

(3) 神と同じように神の民を深く愛した。民が傷ついたときには預言者も痛みを強く感じた(→哀歌)。神の民に神の最善が行われることを望み(エゼ18:23)、警告や矯正のメッセージを忠実に伝えるとともに希望と慰めと励ましのことばを送った。

(4) 神に完全に頼り忠誠を尽すことが人々にとって最善であることを知っていたので、人間の知恵や富や権力やほかの神々などに頼らないように警告した(エレ8:9-10, ホセ10:13-14, アモ6:8)。人々に神の自由と恩恵にあずかり続け、神の基準と契約の義務に従って生きるように絶えず訴えた。

(5) 罪と悪に対して非常に敏感だった(エレ2:12-13, 19, 25:3-7, アモ8:4-7, ミカ3:8)。そして残忍さと犯罪と不道徳と不正には我慢ができなかった。一般の人々にとっては神の律法にわずかに違反したとしか思えないことも預言者には大変な出来事に見えた。霊的、道徳的妥協や自己満足、見せ掛けや弁解には我慢ができなかった(イザ32:11, エレ6:20, 7:8-15, 21-23, アモ4:1, 6:1)。義と善を愛する神の心と悪と罪を憎む神の心をほかのだれよりも共有していた(⇒ヘブ1:9注)。

(6) 神の民の霊性の不足を絶えず訴え、神の律法に忠実に従うように必死に励ました。完全に神に献身していて、心のこもらない献身を嫌い、神に対する完全な忠誠を要求した。

(7) 未来に対する幻を持った。それは時に災難と破壊の予告として示された(イザ63:1-6, エレ11:22-23, 13:15-21, エゼ14:12-21, アモ5:16-20, 27)。あるときには希望、回復、刷新という幻が示された(イザ61:-62:, 65:17-66:24, エレ33:, エゼ37:)。メシヤの来臨について数多くの預言をした(→「キリストによって成就した旧約聖書の預言」の表 p.1029)。

(8) しばしば孤独で悲しみの人だった(エレ14:17-18, 20:14-18, アモ7:10-13, ヨナ3:-4:)。神を敬わない指導者たちから迫害され、神に逆らう人々に平和と繁栄と安全を預言しているにせ預言者によって虐待された(エレ15:15, 20:1-6, 26:8-11, アモ5:10, ⇒マタ23:29-36, 使7:51-53)。けれども同時に、神の心と目的を知っていることが明らかなので、人々も指導者も預言者の人格とメッセージを無視することができなかった(エゼ3:8-11)。

預言者と祭司

イスラエルの歴史の大部分で、預言者と祭司の間には緊張関係があった。神は預言者と祭司がともに働くように計画しておられたけれども、祭司は神の民にしばしば見られる霊的、道徳的腐敗を無視するようになっていた。

(1) 祭司はしばしば現状維持に努めた。霊的状態が実際は良くないのに何事もうまく行っているように振舞った。人々がどんな生活をしていても形式に従って儀式を守っているなら、礼拝の中で人々を導くのに都合が良かった。神を敬って行動することが正しい基準であることを信じていたけれども、信仰が行動を変えなくても祭司たちは気にしなかったようである。

(2) 預言者は祭司と違って生活様式や行動や道徳問題にはっきり発言した。神との関係を保つために宗教儀式や義務に頼っている人々は強い警告と非難を受けた。つまり、しばしば人々の行動を非難していらだたせていた。たとい孤立しても真理を擁護した。神の永遠の原則を人々が具体的に生活に当てはめなければ霊的知識は価値がないことを本当の預言者は知っていた。預言者は倫理の教師であり、道徳の改革者であり、考えを啓発する人だった。人々に聖い生き方をさせるために神に対する罪と反抗をさらけ出した。そしていつも悪から分離し神の目的に完全に献身するように励ますことを努めていた。

旧約聖書の預言者たちのメッセージ

預言者たちのメッセージには三つの大きな主題があった。

(1) 神の性質と特性(→「**神の属性**」の項 p.1016)

(a) 神が宇宙の創造者であり、全能の支配者であり(イザ40:28)、歴史を支配する主であると宣言した。それは神が霊的救いとさばきという神の最高の目的のために、歴史の出来事を用いる能力と権威をみな神が持っておられるということである(⇒イザ44:28, 45:1, アモ5:27, ハバ1:6)。

(b) 神が聖く(純粋、完璧、悪からの分離)、義(特性と行動が完全に正しい)であり、公正(公平でえこひいきがない)であることを教えた。その結果、人々は罪、不義、不公正などを行って神に反発し神を拒んだ。けれども神の聖さと義は神のあわれみとバランスをとるので、神は忍耐し怒りとさばきをすぐには表されない。神の性質は聖いので、神はご自分の民が「**主への聖なるもの**」として分離されることを求めておられる(ゼカ14:20, ⇒イザ29:22-24, エレ2:3)。イスラエルとの独特な関係の中で神はご自分の民が神の命令に従うことを要求しておられる。

(2) 罪と悔い改め

神の契約の民が絶えず不従順であり不誠実であり、偶像礼拝と不正と不道徳を続けているのを見て旧約聖書の預言者たちは神とともに悲しく思っていた。その結果、さばきの厳しいことばを伝えた。そのメッセージはバプテスマのヨハネや主イエスのメッセージと同じ、「悔い改めるか滅びるか」というものだった。もし反抗的な行動をやめて神に従わないなら、自分から滅びを招き神のさばきを受けることになる。預言者はアッシリヤによるサマリヤの滅亡(ホセ5:8-12, 9:3-7, 10:6-15)やバビロニヤによるエルサレムの滅亡(エレ19:7-15, 32:28-36, エゼ5:5-12, 21:2, 24-27, →「**イスラエル(北王国)の捕囚**」の地図 p.633, 「**ユダ(南王国)の捕囚**」の地図 p.633)のような厳しいさばきを予告した。

(3) メシヤ(「油そそがれた者」、救い主、キリスト)の予告と希望

(a) 旧約聖書の神の民は全体として神と神との契約の誓いに対して不誠実だったけれども、預言者たちは希望のメッセージを伝えるのをやめなかった。神がアブラハムにした契約の約束(「**アブラハム、イサ**

ク、ヤコブとの神の契約」の項 p.74)を神に忠実な人々を通して成就されることを預言者は知っていた。神が最も良いとされる時にメシヤは来られ、メシヤを通して神は全世界の人々に霊的救いを提供されるのである。

(b) 預言者たちは、自分たちの時代の霊的混乱と崩壊とメシヤが来られた後の時代への希望との間に立っていた。最大の困難は預言が実現するまで拒まれることを知っていても、神のメッセージをかたくなで反抗的な人々に伝えなければならないことだった(⇒イザ6:9-13)。古い契約(キリストが来られる前の時代の人々を神との関係にとどめておくための神の方法で、従順と心からのいけにえによるもの)の擁護者であるとともに、新しい契約(神の霊的救いと、キリストによって神との関係を更新した人々への希望のメッセージとを伝える神の計画)への道を備える先駆者だった。そして現在に生きていたけれども、未来をも指し示していた(→「旧契約と新契約」の項 p.2363)。

にせ預言者たち

旧約聖書にはにせ預言者のことが数多く出てくる。たとえばアハブ王は400人のにせ預言者たちを集めた(Ⅱ歴18:4-7)。聖書は偽りの霊がその中にあると記録している(Ⅱ歴18:18-22)。旧約聖書によれば、次のような場合にはにせ預言者と見なされた。

(1) 人々をまことの神から離れさせ、にせの「神」やほかの偶像に向かわせる場合(申13:1-5)。

(2) 占い(神を敬わない方法で隠されていることを超自然的に見つけ出そうとすること)や占星術や魔法(魔力と思われるものを用いる)や魔術やその類いを行う場合(→申18:10注, 11注)。

(3) 預言が、聖書にある神の明らかなメッセージを拒んだり対立する場合(申13:1-5)。

(4) 神の民の罪を明らかにしない場合(エレ23:9-18)。

(5) 予言したことが実現しない場合(申18:20-22)。

新しい契約(キリスト以後)の預言者たちは旧約聖書の時代と同じようには用いられなかった。旧約聖書では預言者たちは神がイスラエルに対して話をされる主な方法だった。新約聖書では預言者は教会の中の主な五つの奉仕の賜物の一つに過ぎない(→「奉仕の賜物」の項 p.2225)。新約聖書の預言者には新約聖書時代の奉仕の働きの多面性と相互依存性(→「御霊の賜物」の項 p.2138)から、旧約聖書の預言者にはない限界があった(⇒Ⅰコリ14:29-33)。